

「チアノーゼ」って何？

生まれつきの心臓の病気、先天性心疾患について知るために、ぜひ知っておきたい言葉、「チアノーゼ」について説明していきます。

「チアノーゼ」って何？

すごく寒い時や、冷たいプールに入ったときなど、特に、顔色やくちびるの色が紫色になることも「チアノーゼ」の一種で、ふつうはあたたかくなると顔色は戻ります。



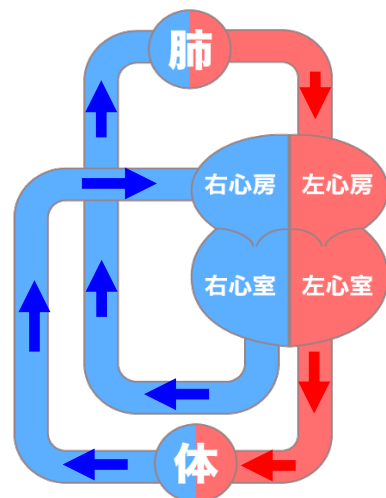
しかし、先天性心疾患の中には、いつも顔色が悪いままの病気があります。



どうしていつもチアノーゼになるの？
どんな病気でそうなるの？

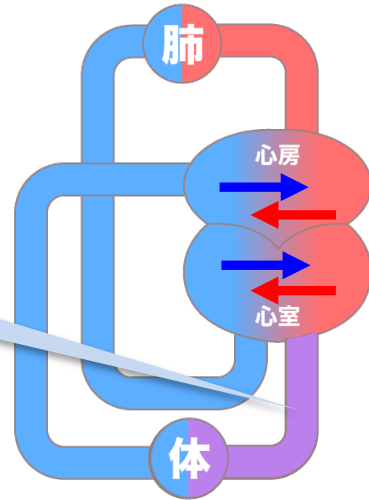
「[心臓のきほん](#)」で説明しましたが、心臓が左右に分かれている理由は、**静脈血と動脈血が混ざらないようにするため**です。混ざらないことで、効率よく全身の臓器に酸素を届けることができます。

ふつうは**静脈血と動脈血**は混ざらない



しかし例えば、心房と心室が1つずつの病気だと、心臓の中で**静脈血**と**動脈血**が混ざってしまい、酸素の少ない**静脈血**が体に流れてしまうため、いつも顔色が悪い「**チアノーゼ**」の状態になります。

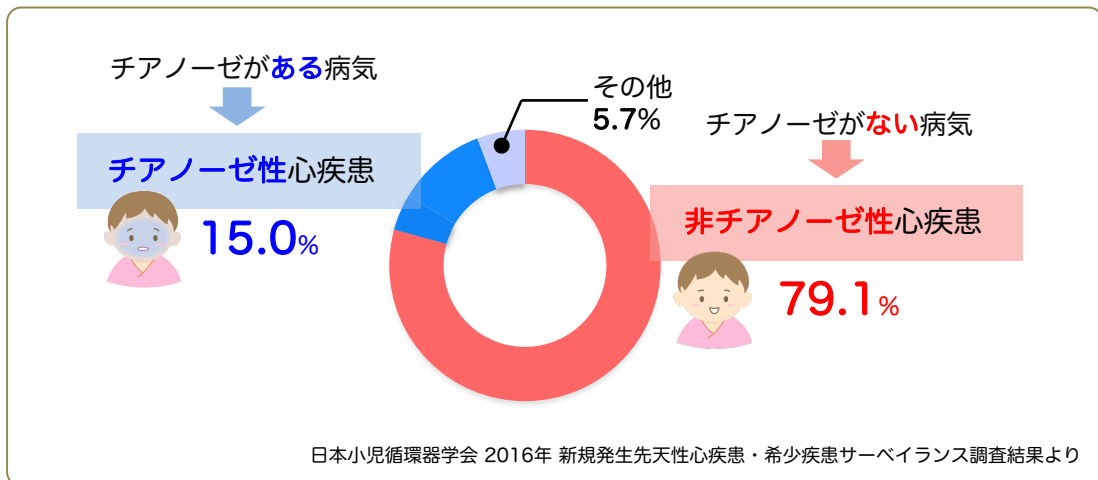
心臓の中で**静脈血**と**動脈血**が混ざるため、体に流れる血液の酸素が少なくなり、「**チアノーゼ**」の状態になる



いつも体に流れる血液の酸素が少ない、チアノーゼの状態が続く病気をまとめて「**チアノーゼ性心疾患**」と呼びます。

先天性心疾患を大きく2つに分けると、チアノーゼのない「**非チアノーゼ性心疾患**」と、チアノーゼの状態が続く「**チアノーゼ性心疾患**」に分けられます。それぞれの割合は**グラフ1**のとおりで、非チアノーゼ性心疾患のほうが多いです。

グラフ1：先天性心疾患における非チアノーゼ性心疾患と、チアノーゼ性心疾患の割合





チアノーゼってどれくらい苦しいの？

体に流れる動脈血の酸素飽和度の正常値は96～100%です。ふつうの人でも、2000～3000mの高い山に登ると、空気中の酸素が少なくなるため、動脈血の酸素飽和度は下がり、高い山で酸素飽和度を測ると、80～90%程度になります。

高い山の上での
酸素飽和度は80～90%



チアノーゼ性心疾患の子どもの酸素飽和度は、病気や状態によって差はありますが、いつも80～90%であることが多く、泣いたりすると、60%台ぐらいまで下がることもあります。ふつうの人が高い山に登ったときよりも酸素飽和度が低く、いつも苦しい状態ですが、子どもは体が慣れてしまっていて、あまり症状がないこともあります。

チアノーゼ性心疾患の
子どもの酸素飽和度は
いつも80～90%



泣いたりすると
60%台になることも



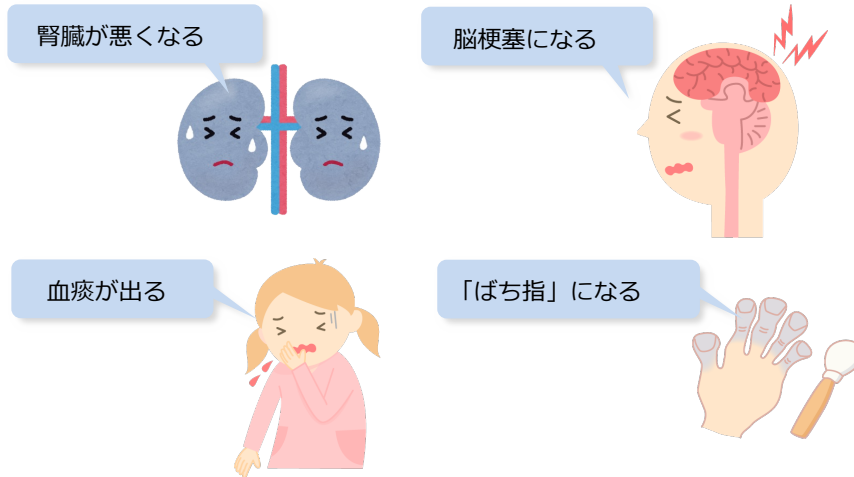
チアノーゼをそのままにしておくと…

チアノーゼの状態をそのままにしておくと、どうなるのでしょうか？

だんだん日常生活がづらくなってきて、階段が登れない、着替えるなど軽い動作だけで息切れがする、などの症状が出てきます。



この他に、チアノーゼをそのままにしておくと、腎臓が悪くなる、脳梗塞になる、血痰が出る（肺出血）などの全身のいろいろな症状が出ます。また、長い間チアノーゼが続くと「ばち指」という指の形になることもあります。



このように、チアノーゼをそのままにしておくと、いろいろな症状が出るため、症状が出ないように、なるべく治したほうがよいです。「チアノーゼ性心疾患」の手術の目標の1つは、チアノーゼをなくすこと、です。

「チアノーゼ性心疾患」の手術の目標の1つ



チアノーゼをなくすこと

本ホームページは以下の研究費により運営されています。

厚生労働省科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
「先天性心疾患を主体とする小児期発症の心血管難治性疾患の生涯にわたる
QOL改善のための診療体制の構築と医療水準の向上に向けた総合的研究」